

## ●和洋折衷モダン建物

九州の屋根・傾山（一、六〇二<sup>ト</sup>）の南麓の谷を源にして流れ出る日之影川は、険しい渓谷を刻んで約二十<sup>キ</sup>流れ下り、日之影町の中心部で五ヶ瀬川に合流する。

上流に見立鉱山跡がある。一九二四（大正十三年）年、英国人経営者・ハンスハンターは内藤家から鉱業権を買い取り、鉱山の操業を開始した。以後十数年間、鉱山は国内有数のスズ鉱山として繁栄し、渓谷に沿って千二百人を超える人々が居住した。

山奥の狭い斜面には、鉱山の施設や社宅、診療所、理髪店などが立っていた。なかでも英国人技師八人の宿舎であるクラブハウスは、ハンターが好んだレイモンド建築様式で、和洋折衷のモダンな建物であった。

しかし、日中戦争が起り、日本と英米両国との関係が悪化し始めた一九四〇（昭和十五

年、英国人はすべて帰国してしまった。以後、国内資本が経営を引き継いだ。多くの曲折を経て六九（同四十四）年、閉山した。

クラブハウスは、八六（同六十二）年に修復されて国の登録文化財となり、鉱山の歴史を語る「英国館」となっている。背景の自然は祖母・傾国定公園で、「かもしかの森」と呼ばれ、動植物の宝庫。「英国館」のわきにはリフレッシュハウス出羽（いずるは）と、キャビン五棟が建てられ、夏は利用者が多い。

町から車で約四十分。ヤマメ釣りやトロッコ道のウォーキングも楽しめる。

手前、車で十分のところには戸川集落がある。通称「石垣の村」と呼ばれる。全山が石灰岩から成る戸川岳（九五五<sup>ト</sup>）の山ろくに位置する。

阿蘇溶結凝灰岩は、この谷にも深く入っており、戸川岳のふもとを埋めていた。村人は凝灰

岩を取り出して石垣を積み、棚田状に田地や屋敷地を広げた。火災に備えて倉庫も石蔵にした。村人の生活の知恵から生まれた石積みではあるが、並の技ではない。

安政二（一八五五）年十一月十一日、安政の大地震が起こった。江戸市中の被害は甚大で、江戸城の石垣も大きく崩壊した。このとき、石工の技術を見込まれて戸川から、坂本寅太郎と富士本嘉三郎の二人が江戸に召し出された。二人はこの経験からさらに石積みの工法を学んで村に帰り、見事な石垣を残すことになった。二人の墓もある。

村には石垣茶屋があり、宿泊施設としても利用される。注文があれば、地元の伝統料理も味わえる。

甲斐亮典



石垣の村の石蔵。石工の優れた技を伝える